

# OUMC

## 白馬集会を盛り上げて

### 対岳館には50周年記念碑も

会長 大野 義照

毎年夏、長野県白馬村・ホテル対岳館で開く「白馬集会」の時期が迫ってきた。この集会は、梅池高原の神ノ田圃のそばにあった阪大山の家「梅の木寮」が1996年の大雪被害で撤去されたのを受けて、梅の木寮で開かれていた夏の例会の場所を白馬村に変更したものだ。1999年にはまず阪大山岳会創立50周年を



記念する集会が開かれ、会員32名と家族4名が集まった。

碑除幕式のあった2001年には会員25名と家族3名が参加した。以来、毎年8月末か9月初めの週末に開かれ、今年で19年になる。

対岳館は、戦前から戦後にかけて旧制浪速高等学校および大阪大学山岳会の後立山方面における登山活動の根拠地となってきた。50周年記念碑が対岳館に設置されることになっ

たのもそんな縁からで、先代館主の丸山庄司さんのご理解を得て敷地の一角に設けられた。そこからは阪大山岳会創立当時の活動舞台になった後立山の峰々がよく見える。碑は白馬三山を源とし、白馬村を流れる松川から採取された原石を加工したもので、記念碑には次のような文が記されている。

「大阪大学山岳会発祥の地 1948年春 この地に有志が集い 大阪大学山岳会創設の第一歩を印した当時 対岳館の館主は山岳ガイドの丸山與兵衛氏で 地元の関係者と共に後立山における我々の登山活動に寄与するところ大であった 創立50周年を機に これを顕彰し碑を建て感謝の意を表する 2000年 9月4日 大阪大学山岳会 会長 徳永篤司」

白馬集会の近年の参加者は多い年で16、7名、少ない年で10名くらいである。ここ数年は少なめである。集会1日目は夕食会の後、別棟の与

兵衛倶楽部での懇親会が恒例だ。同倶楽部には庄司さんが収集した山の書籍や古い登山用具が展示され、昨年からは故・住吉仙也会員がエベレスト遠征で使った登山用具なども集めた「大阪大学山岳会コーナー」も設けられた。

2日目は自由行動で、創立50周年記念で集まった時は雨飾山、白馬大雪渓、梅池自然園、八方尾根の各コースに分かれて行動した。2泊3日で唐松・五竜岳コースに出かけたこともある。昨年は八方尾根中腹の北尾根高原を散策、眺望と高山植物を楽しんだ。

近年、参加者が減ったのは、現役時代に対岳館に世話になった会員が年を取って出席できなくなったせいもあり、若手のみなさんの協力を得て、記念すべき集会の参加者をもう少し増やしたい。それには2日目の行事計画を前もってお知らせする、あるいは要望をお聞きすることが大事かと思う。出かけるところはいろいろでもある。山田靖則副会長は今年の集会前に現役を連れて2泊3日の山行を計画しているという。

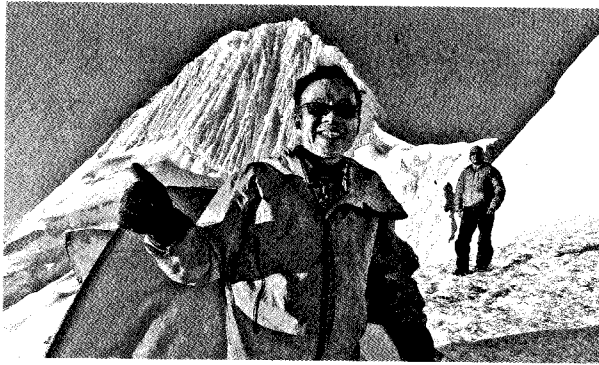
今年の白馬集会は9月1日(土)、2日(日)を予定しており、3日(月)には有志のゴルフコンペもある。みなさん、お誘い合わせのうえ参加し、白馬集会を盛り上げてください。

# 南米の氷雪の山、登った

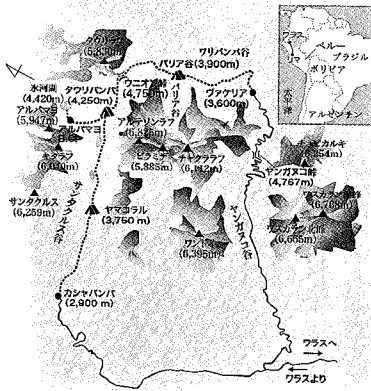
## アルパマヨ南西壁の難ルート

野口 明

昨年7月、南米ペルーのブランカ山群に属する氷雪の山、アルパマヨ（5,947m）の南西壁フレンチダイレクトルートにトライした。メンバーは私と山岳同志会OBの岡島氏。定年近くになって6,000m近いバリエーションルートに行けたことは意外だったし、やはり山は人生における至高の満足が得られる行為だと確信できた山行となった。



アタックキャンプで。後方がアルパマヨ頂上



「ベースキャンプへその1」  
7/16（晴）7:30ワラスのホテル発。チャーターバスでカシヤパンパ（2,940m）10:00着。ヤマコラル（3,800m）15:00着。  
最奥の村のカシヤパンパは林道終点で、スタッフにロバ3頭で荷物を運んでもらい、空荷でトレッキングだ。見上げるほどの岩峰が連なるサントクルス谷を高山植物の歓迎を受けながら進む。4,000mまでの高所順応はできていよう、快適なウォーキングとなる。この山行では我々がキッチンポーターを兼ねているので、キヤラバン中はコックに

なる。夜空は銀河系と南半球の星座がどこまでも美しい。

### 「ベースキャンプへその2」

7/17（曇）ヤマコラル8:10発。9:10イチコーチャー着。11:30橋（4,000m）着。14:30ベースキャンプ（4,320m）着。

ブランカ山群の名峰がチラチラと見え出して胸がいっぱいになる。サントクルス（6,259m）、キタラフ（6,036m）、アルテソ（6,025m）、ピラミデ（5,885m）、チャクララフ（6,112m）、カラツ（6,025m）、そしてアルパマヨ。聞きなれない山ばかりのようだが、実は日本人がよく見ている山もある。アルテソはパラマウント映画の冒頭画面に出てくる山のモデルなのである。アルパマヨは、有名なドイツ人登山家が「世界で最も美しい」と評した山だ。ここからは上部キヤラバンへの荷揚げを自分達でしなければならぬ。

### 「上部キヤラバンへ」

7/18（曇のち晴）10:00ベースキャンプ発。13:45モレーンキャンプ（4,800m）着。

ベースキャンプから一段上がった氷河の末端にテントを張る。徐々に高所の影響が出てきた。対岸の山の眺めも格別だ。夜はポトフと味噌汁、アルファ米と、日本の山と変わりな

い。

7/19（晴）8:05モレーンキャンプ発。13:45ハイキャンプ（5,400m）着。

この日からはずっと雪と氷の世界である。氷河を経て、最後の傾斜の強い懸垂氷河を2ピッチでハイキャンプ入りとなる。ハイキャンプはキタラフとアルパマヨの間のコルにある。氷河はクレバスの巣となっているので、ジグザグにトレースする。ロープをつなぎ合い、タイトロープでコンティニューアスだ。ハイキャンプからはアタックするアイスフルートがよく見える。まさしくフルートを縦に割った形だ。頂上から一直線に下に延びた氷雪の壁の美しいラインがフレンチダイレクトルートだ。懸垂氷河の苦しさから、本当に感じるのだろうか、他人事のように感じてしまう。

夜は野菜スープとアルファ米と味噌汁。味噌汁をこれほど美味しいと思ったことはあっただろうか。弱った胃腸には強い味方だ。私も高度障害が消化器系にきているようで、夜は2時間おきのトイレとなってしまった。シュラフの出入りにハーハー、ゼーゼーと渾身の労力を費やしている。こんな体で果たしてアタックできるのか？まどろみながらも、その時間はやってきた。

## 「アタック」

7/20(晴) 01:40ハイキャン  
プ発→02:40アイスフルート取付  
→7ピッチで頂上着(9:10→10:00)  
→8ピッチの懸垂下降で取付  
へ(12:00)→大休止してハイキャン  
プ着(13:30)

銀河系も燦然と輝く夜空を仰ぎながら真夜中にテントを出る。腹痛と浅い呼吸に喘ぎながら、アイゼンを引つ掛けないように足を繰り返し出す。頭の中はそれ以外の命令は存在しない。呪文のように、あと何ピッチ、あと何ピッチと心の中で呟きながら高度を稼ぐ。5ピッチ目くらいで夜が明けてきた。そして7ピッチ目で斜面はなくなつた。頂上は畳1畳くらいの広さで、大パノラマを提供してくれた。あとは慎重に降りるだけだ。懸垂下降なのに相変わらず息が切れ、戻しそうになる。所々、懸垂ポイントが離れてクライムダウンもあり、緊張感あふれる下降となった。

このチャンスを与えた家族と、登山を成功させてくれたパートナー、スタッフに感謝し、目的達成に満足した。今回の山行は長年の時の流れの中の一期一会が紡ぎあつて成り立っている。岡島氏は37年前にチャクララフにトライして以来のプランカ山群再訪であり、アルパマヨへの

必然のトライと聞いている。岡島氏と私の出会いは20年前に遡り、山ではなく仕事上の出会いであった。30数年間山登りをやってきて、今回、岡島氏に誘われてアルパマヨに登れたのは、ちょうどウイスキーが熟成

## OB同行で14名の大部隊に

### 現役の北穂高岳山行

山岳部前主将 谷井 脩一郎

昨年8月10日から13日にかけて行われた現役部員による北アルプス北穂高岳山行について報告します。穂高周辺へは一昨年夏、中之島山岳部(医学部)と合同で出かけました

して樽の中の香りが紡ぎあつた結果、グラスに注がれた産物に近い。私の登山人生のビンテージが、また一つ完成した。

(1983年基礎工学部卒)

が、阪大山岳部単独の北アルプス山行は久しぶりで、しかも現役10名にOB4名が同行する大部隊となりました。

「10日」現役部員は夜行バスで現地に向かいました。午後5時半に大阪梅田を出発し、10時名古屋着。各々、夕食を済ませて11時に名古屋を出発しました。

「11日」上高地→徳沢→横尾→涸沢 バスは午前5時に上高地到着。5時半にOBの方々も車で到着され、朝食をとつてから6時に上高地を出発しました。この山行は日程が「山の日」と重なっており、テント場の混雑が予想されました。そこで、パーティーを2つに分け、先行隊がテント場を確保するようにしました。先行隊は順調に明神池、徳沢園を通過し、8時半に横尾着。横尾

では熱中症予防のために経口補水液が配られていて、長蛇の列ができていました。

11時半に涸沢に到着すると、テント場は比較的空きしており、まとまってテントを張ることができました。山小屋に泊まる人が多かったのだろうと思います。その後、後発隊も到着し、午後5時に夕食。現役部員でシチューをつくりました。OBの方にも好評で良かったです。翌日に備え、8時に就寝しました。

「12日」涸沢→北穂高岳→涸沢岳→涸沢 4時起床。朝食(棒ラーメン)を済ませて5時半に出発。途中の南稜取り付きのハシゴ場で、先行パーティーからヘルメットが降ってきました。とても怖かったです。部員が無事キャッチして届けることができました。事故にならなくて本当に良かったと思います。

登り始めのころは天気も良く、奥穂高岳がよく見えていましたが、8時過ぎからガスが始めました。幸い、雨は降りませんでした。9時に着いた北穂高岳山頂ではガスが濃く、展望はありませんでした。個人的には山頂から槍ヶ岳までの稜線を眺めるのを楽しみにしていたので残念でした。

ここからは来た道に戻る。パーティーと涸沢岳経由で穂高岳山荘が



北穂高岳頂上で

ら涸沢に下りるパーティーに分かれ  
ました。涸沢岳に向かうルートは視  
界も足場も悪く、初めての縦走だっ  
た私には大変厳しいものでした。し  
かし、冷たい岩肌に必死でしたがみ  
つき、何とか渡り切ったときは言葉に  
出来ない達成感がありました。テン  
トに戻ると、先に戻ったOBが甘味  
を用意してくれていました。

午後5時からの夕食はカレー。就  
寝は8時でした。

「13日」涸沢→上高地 4時起床。  
朝食はお茶漬けと漬物。早朝は快晴  
で、きれいな朝陽を拝むことができ  
ました。最終日なのでテントの撤収  
などのあと、7時過ぎに涸沢を出発  
し、正午過ぎに上高地に到着しまし  
た。OBの方はそのまま車で帰阪さ  
れ、現役は風呂に入ってからバスで  
帰りました。

◇  
大きなハプニングやケガ人もな  
く、無事に日程を終えることができ  
ました。現役部員は1回生が4名、  
2回生が2名、3回生が3名、院生  
が1名という構成で、本格的な登山  
が初めての部員が4名いました。体  
力の面で心配もありましたが、途中  
でバテた様子もなく、登山の厳しさ、  
楽しさに触れる良い機会になったと  
思います。初めて見る高山の景色に  
も感動したようで、今回の経験がこ

れからもずっと記憶に残ることを願  
います。他の部員も、彼らのサポー  
トをしながら、シーズンの北アルプ  
スを満喫できたのではないでしょう  
か。滞在期間は短かったですが、比  
較的余裕のある計画で、のんびりと  
楽しめる山行になったと思います。

◇  
今回の山行では、計画段階からO  
Bの方々にたくさんのお力添えを頂  
きました。感謝申し上げます。今後  
も、このような交流の機会を持てた  
らと考えております。

◇  
これ以外の昨年度の主な活動で  
は、月に2回、中之島山岳部と合同  
の定例山行に参加しました。主に日  
帰りで近畿の低山に登りました。ポ  
ルダリング活動では、部内試合を  
行ったり、一部の部員は大会へ出場  
したりもしました。本年度も山岳部  
のますますの発展を目指し、登山、  
ポルダリング双方に力を入れて活動  
していきたいと思えます。

(人間科学部4回生)

## 山岳部夏合宿に同行して

奥山 宏臣

昨年8月11～13日、山岳部現役部  
員10名とOB4名(草尾、科野、奥  
山、森藤)とで北穂高岳に行つてき  
ました。阪大山岳部は8年ほど前に

現役部員がわずか1名となり、廃部  
の危機に直面しましたが、OB諸氏  
や中之島山岳部員の皆さんのご協力  
のおかげで、昨年春には部員が40名  
を超えるまでに復活しました。しか  
し、多くの部員は人工壁を対象とし  
たクライミング活動が中心のため、  
山岳部伝統の全部員が参加する夏山  
合宿には行っていないませんでした。た  
だ、山岳部の「山」の字に興味を持っ  
て入部した部員も少なからずいます  
ので、そうした部員にまず夏山を経  
験してもらおうというのが今回の山  
行の目的でした。

昨年春の部会で希望者を募ったと  
ころ、思いのほか多くの部員が参加  
を表明しました。14名という大パー  
ティーの山行を実現するには計画書  
の作成、装備の点検・購入、食料の  
買い出し、山岳保険の加入、交通手  
段の確保などの準備を皆で分担して  
遅滞なく進めることが必要です。山  
行計画は上高地→涸沢→北穂アタツ  
ク→上高地という「鉄板ルート」で  
すが、今回初めて山に入る部員もい  
て、まずは個人装備を揃える、テン  
ト設置に慣れるといった基本的など  
ころから始めました。

山行が近づくにつれ、準備に不備  
はないか、体力は大丈夫かなど、不  
安は募りましたが、入山日には皆、  
時間通りに上高地に集合できまし

た。

いざ入山してみると、現役部員は  
皆元気いっぱい、OBが大きく遅  
れをとることもしばしばでした。山  
行中は天候にも恵まれました。入山  
時は向こう3日間の予想降水確率が  
80%超と絶望的な数字で、すでにパ  
ラパラと小雨も降り始めていたの  
で、3日間、雨の中での行動を覚  
悟しました。しかし、雨に降られた  
のは、この入山時と1日目の夜だけ  
で、行動中は終始、快適な夏山を楽  
しむことができました。

2日目の北穂頂上からは、槍ヶ岳  
に続く大キレットの稜線を望むこと  
ができましたし、最終日にはモルゲ  
ンルートに染まる吊尾根というおま  
けもついて、皆それぞれの夏山を満  
喫することができたと思います。最  
終日、全員けがもなく、無事、上高  
地に下山できたときは本当にやれや  
れという気持ちで、OB一同、安堵  
しました。

夏山合宿に必要なこうした一連の  
準備を多くの現役部員に経験しても  
らえたことは何よりの成果となりま  
した。この経験が今後、山岳部の活  
動が広がってゆくきっかけになれば  
と思います。そして、いつの日か、  
阪大山岳部伝統の夏山合宿が復活す  
ることを願ってやみません。

(19984年医学部卒)

# 飲み水不足で途中撤退

## 急坂の笠ヶ岳新道

山田 靖則

前年に続いて昨夏も北方稜線から劔本峰を計画したが、メンバーが集まらず、他の山域に変更することに。単独となるのでアプローチが短く、登山者もあまり多くなく、山の高さもそこそこという条件で探して笠ヶ岳に落ち着いた。

笠ヶ岳は現役4年の夏山縦走時に新人を連れて登っており、この時はできたばかりの笠新道を下山した。この笠新道は北アルプス三大急登（合戦尾根、早月尾根、ブナ立尾根）に取って代わるうかという急な登りだが、時間をかけて登れば問題はないであろうと考えた。しかし、予想以上に手強く、飲料水不足から途中での撤退という惨めな幕切れに終わった。

8/4（曇） 新穂高（13：30）  
→ワサビ平（15：00）

名古屋経由で高山に入り、バスで新穂高へ。登山届を提出してワサビ平に向かう。小屋で情報を聞くと、翌日は晴れとのこと。曇りか霧を予想していたので幸運と思ったが、実は、この天気が裏目に出る。小屋横のテント場に新規購入したモンベル

のテントを張る。2人用なのでゆったりと荷を広げる。

8/5（晴のち霧、のち曇）ワサビ平（5：45）→笠新道登山口（6：05）→撤退（11：30）→登山口（14：30）→ワサビ平（15：20）

3時過ぎから出発するグループのざわめきに目が覚めたが、また寝入ってしまった。目を覚ますと5時を回っていた。6時には登り始めるつもりであったので、慌ててラーメンとモチの朝食をとり、テント撤収。笠新道登山口（1、350m）で水を補給し、水筒やペットボトルに合計2.5リットルで登行開始。水の量は小屋で2リットル以上を勧められたので、持てるだけにした。このため荷の重量は15kgを超えてしまった。

笠新道は初めのうちは折り返しのよく踏まれた道で、ゆつくり登る。そのため、この日、新穂高から来たと思われるグループに次々に抜かれる。木々の間から中崎尾根の向こうに穂高の稜線が見えるころから日差しがきつくなり、汗を大量にかくようになった。このため、途中でタイツを脱ぎ、1時間登ったころ、左膝裏に痛みが出て15分ほどの長休憩。何とか痛みもなくなったので登行を再開し、1,900mあたりから槍の穂も小槍、孫槍を従えて見えるように

なる。木がまばらになるにつれて急登と日差しで水の消費が多くなる。

そのうち軽い熱中症状が出てきたので、雪が残る穴の前で15分ほど体を冷やす。天気も霧になり、沢通しの上昇風も吹き始め、登りもきついながら楽になる。

しかし、杓子平への入り口のコル下100m足らずの位置で水を確認すると、残り500cc程度。笠のキャンプ地までは4時間程度はかかると思われる。この水では足りない。脱水症状が出ては元も子もなく、ビバークするにも水が足りない。霧も出て視界も悪く、笠の展望も望めそうにない。

結局、これ以上の登行を断念して下山することにした。2、350m付近だった。

しかし、急登のあとの下りは足への負担が大きく、ピッチが上がらない。最後の1時間はなげなしの水も切れ、急激なほどの渴きを感じたうえ、登山道わきの斜面にスリップ。ダケカンバで肩を打ちながら2リットルで停止した。

なんとか登山口まで下り、水を一気に500cc飲み、先に下っていた登山者の方としばし歓談した。この朝の笠ヶ岳山頂は上天気だったようで、ご来光を撮った写真を見せてもらう。槍の穂のすぐ北側からの日の

出で、これが見られなかったのは残念であった。

笠新道はこの登山口とキャンプ場下の雪渓にしか水場がなく、途中は消費するのみだ。このことは十分わかっていたが、好天無風。プラス草いさの条件下では発汗量はものすごく、あながち飲みすぎたとも言えない。体力は残っていたので水の管理の大切さを痛感した。

ワサビ平に戻ってキャンプ場に行くと、すでに多くのテントがあり、やがて20人程度の高校登山部のグループも来て、テント場はほぼいっぱい。18時過ぎから雷雨となり、一時はバケツをひっくり返したような猛烈な雨となる。

8/6（曇後晴）ワサビ平（6：30）→新穂高（7：30）

のんびりと新穂高に下り、下山届を提出し、バスで高山へ。



笠ヶ岳は下から登ろうとすれば、古典的なクリヤ谷や鏡山を経由する小池新道があるが、いずれも距離がある。笠新道は距離こそ短いが急登といわれるだけあって、さすがに体力勝負の登山道である。そして、途中、水場がないので、小屋泊まり（ワサビ平小屋、笠ヶ岳山荘）が無難であろう。

（1971年工学部卒）

## 去年は46回登った

### 老いに負けず頑張っています

兼清 喜雄

会社勤めの間は忙しくて、ほとんど登山をせず、その後、妻の病気の面倒をみることに10年。毎年の白馬集會だけは家族に無理を言いつて出かけていたが、それ以外は出かけることができませんでした。

73歳で一人になって、これからの生活を考えると、出来るだけ健康でいて子供達に迷惑をかけないようにと、ハイキング・登山を再開しました。いったん出かけ始めると欲が出て、次第に回数が多くなり、距離と



高度差のある山やコースに行くようになりました。ただ、年齢を考えると無雪期の日帰り登山で、山小屋には泊まらないのを基本的な条件にしています。従って12〜3月は房総、三浦、伊豆、静岡の低山に、4〜11月

は関東を中心に安全なコースに出かけています。

おかげで足腰の筋肉もだいぶ付いてきて、ほとんど毎週、出かけられるようになりました。土・日・祭日は週1ゴルフで、山に出かけるのは平日。登山口まで車で行くのを基本にしており、日の出とともに歩き出して、できるだけ早い時間に終わるようにコースを選んでいきます。風が穏やかな晴れの日を選んで、出かける前日に候補の中から山と登山コースを決めています。さらに花、紅葉なども重要な条件としています。

最近2年間の実績は

2016年 37回、歩行距離合計4700キ、高度差合計32,000回(ゴルフは56回)

2017年 46回、歩行距離合計5000キ、高度差合計33,000回(ゴルフは49回)

出かけた主な山は

・飛竜山(雲取山の隣り) 歩行距離22キ、高度差1,700回、歩行時間約11時間(距離と高度差が最大)  
・仙丈ヶ岳(南ア) 3,033回、北沢峠より。最近登った最高峰。

ほかに残雪の月山(黒百合の時期)▽紅葉の八甲田山(初冠雪で上部は雪化粧)▽紅葉の雲仙普賢岳▽霧島ツツジの九重連峰などで、日帰りできない所も観光をかねて2、3日で

出かけました。これ以外はほとんどが関東、長野、新潟、東北です。

81歳になって、さすがに体力は落ちてきましたので、登りは標準コースタイムの1.2倍程度、高度差が大きくなると、さらに時間がかかっています。今後も体調を見ながら毎週出かけたいと思いますが、いつまで登れるかはわかりません。今年も目下、昨年と同じペースで山とゴルフを楽しんでいます。

(1960年工学部卒)

## 上、下級年次も出席

### 昭和38年入部同期会

昨年11月18日、東京・赤坂の中華料理店で、昭和38年入部同期会を開催しました。同年入部者は12名でしたが、50余年を経て、うち6名が顔を合わせる事ができました。卒業後初の同期会に、一同、感慨ひとしおでした。

それに加えて現役時代に山行を共にした上級、下級年次の方々6名にも出席いただき、出席者は計12名となりました。しかも、うち5名は関西からわざわざ参加いただいたほか、数十年ぶりに顔を合わすメンバーも多く、話題の尽きない時間でした。そして予定の2時間があつという間に過ぎてしまい、名残を惜し

みつつ散会となりました。

これをきっかけに懐かしい仲間との会をこれからも計画していきたいと思えます。

◆出席者は次のみなさん。

・昭和38年入部者(関東在住) 泉田浩二、出雲路敬孝、加藤佑二、糸井文彦(関西から) 大野義照、黒田治朗

・先輩、後輩の方々(関東在住) 横尾秀次郎、石原敏雄(関西から) 高田邦雄、吉川信也、山田靖則  
・特別参加 牧野恵美子(故・牧野大輔氏夫人、水戸から)

(幹事・糸井文彦)

## 阪大コーナーに注目

### 2017年白馬集會

毎夏恒例の白馬集會が昨年9月2日、長野県白馬村八方のホテル対岳館で開かれました。出席者は大野義照会長はじめ、90歳を超えられた大島輝夫さんら10人でした。

大野会長の挨拶のあと、会食に。途中、出席者の現役当時のエピソードや近況報告、また事務局から現役の夏山山行報告などもあり、丸山庄司さん差し入れの地元の生原酒を飲みながら一次会終了。二次会はいつもの「与兵衛倶楽部」に場所を移して歓談しました。

同倶楽部には住吉仙也さんのピツケルなど遺品や三枝礼子さんのP29を描いた油絵など本会が対岳館に寄贈した数々の品が「大阪大学山岳会コーナー」として展示され、出席者の注目を集めました。



阪大コーナー

翌3日午前中は希望者を募って「北尾根高原」へ。近年、地元がPRに力を入れている所で、ふもとからリフト一本で標高1,200メートルの高原に到着。お花畑と白馬三山などの眺めを楽しめる年寄り向けのコースでした。

出席者は次のみなさん。  
大野会長、大島輝夫、宮本貞雄、岡田博司、兼清喜雄、野田憲一郎、前

澤祐一、高田邦雄、山田靖則、田中喜樹

## 現役的活動報告も

### 2018年新年会

2018年の新年会は2月16日夕方から、阪大中之島センター交流サロンで開かれ、山岳会、現役山岳部から、それぞれ8人、合わせて16人が出席しました。

冒頭の挨拶で大野義照会長は本白根山の噴火に関して「登山ルートだけでなく、山そのものを多面的に調査する必要がある」などと話しました。現役からは出席者一人ひとりの自己紹介の後、昨年7月の北穂高山行などの活動報告がありました。

その後、山岳会員からも活動報告があり、山田靖則氏は8月の笠ヶ岳や11月の大山など、80歳を迎えた広瀬貞雄氏は10月の立山について報告。また、大野会長は震災後に訪問したネパールの状況について報告しました。

他の出席者は次のみなさん。

(会員は卒業年次順)

打出英樹、大川和秋、高田邦雄、黒岩芳夫、科野昌藏  
「山岳部」谷井脩一郎、大上毅彦、染井駿太、北林史弥、丸岡漢、南口和真、矢野直人、山本悠磨

## 東京支部だより

### 春の懇親会に18人

東京支部恒例の春の懇親会を3月24日正午から、桜が見ごろの東京大学駒場構内のレストラン「ルヴェンヴェール駒場」で開催しました。50代の若手から80代の大先輩まで総勢18人が出席し、フレンチランチを楽しみました。

最長老の宮本貞雄さんの乾杯の音頭のと、ビールとワインを次々と空け、和気あいあいとした雰囲気です。山岳部現役当時の思い出話や近況報告で盛り上がりました。また、青森から木嶋良雄さんがはるばる駆け付け、持参された手作りのケーキとパンを全員に振舞われました。

最後に全員からスピーチがあったが、病気の話は全くなく、多くの会員が海外を含む登山、サイクリング、ゴルフ、ボウリングなどを楽しんでいる様子が見られました。

出席者は次のみなさん。

(卒業年次順)

宮本貞雄、兼清喜雄、野田憲一郎、酒井次郎、前澤祐一、米澤成二、横尾秀次郎、出雲路敬孝、泉田浩二、石原敏雄、鹿野慎吾、高橋正身、井上太一、松浦壽彦、森良平、木嶋良

雄、村田正弘、畑秀信

(井上太一記)

## 会員の近況

総会や白馬集会の出欠はがきなどから抜粋。その後の変動は未確認。  
卒業年次順Ⅱ西暦。敬称略

**二本 節夫**(工54) だんだんとボケて「あつ、しまった」と思う回数が増えました。しかし、他人に迷惑をかけた時、命に関わったりするようならトラブルは幸いありません。自動車の運転もしていません。基会にも月10回程度参加しています。

**宮本 貞雄**(工54) 残念ながら、足腰を痛めたため、登山・スキーは卒業しました。

**酒井 次郎**(工62) 6年前から始めたサイクリングの走行距離は21000キロ。

**白井 達郎**(工62) 体力維持のため、ウォーキングを心がけていますが、山に登るなどは遠い夢となりました。

**大川 和秋**(工64) 「黄色靱帯骨化症」という聞き慣れない病で胸椎を手術、8年目に入りました。うまく回復すると、相当な働きが期待しています。まだ両足が不自由ですが、希望的観測に終わらせないよう

頑張っています。今年は六甲山、京都北山の初心者コースに挑んでみようとと思っています。

**横尾 秀次郎**(工64) 去年は九州、屋久島旅行、光岳登山、京都・奈良旅行とよく出かけました。今年は早月尾根。少ししんどいです。

**糸井 文彦**(経67) 昨年夏、4年連続、4回目の「自転車ひとり旅」に出かけました。走ったのは富山市から飛騨地方を経由して、実家のある尼崎市まで5日間、約410<sup>キロ</sup>。全行程を自走しました。途中、2カ所(高山市、草津市)で古い友人を訪ねて旧交を温め、関ヶ原では古戦場を実見し、強者どもの往時を偲んで、しばし時間を忘れました。尼崎へ到着した日の夜は、たまたま神戸で中高時代の自転車友達を集まりに参加し、楽しい語らいの時間を過ごすことも出来ました。

**黒田 治朗**(医69) 認知症予防にNHKラジオ講座(仏語、独語)を聞き、ゴルフもしていますが、いずれも一歩前進、二歩後退。「継続は力なり」と頑張っています。

**甲田 吉彦**(基70) 太極拳、木工、たまに旅行と、結構忙しくしています。

**鹿野 信吾**(理71) 昨年10月にクリニックを次男に譲り、退職しました。まだ週3日ほど外来の診察をし

ていますが、以前とは異なり余裕が出来ました。

**數本 勝**(工72) 2017年に登った主な山。3/3〜6谷川岳▽7/31〜8/4劔岳▽内蔵助谷から三ノ窓経由本峰往復▽10/3〜6濁沢・穂高▽観光シーズンたけなわに写真撮り。併せて穂高連峰を登る▽10/26〜28南アルプス鳳凰三山▽夜叉神峠から三山〜早川尾根▽広河原。早川尾根から甲斐駒をめざしたが、天候悪化で撤退。

**井上 太一**(理73) 昨夏、妻と日帰りで白馬岳の大雪渓を往復登山し、下山途中、高台で休憩時に岩壁が崩壊し、家・車ほどの岩4個がお花畑に溝を掘りながら、ごろごろと下り、雪渓に入るのを目撃しました。山は怖い！そのためではないですが、このごろは近場の高尾山に専念しており、昨年は50回登りました。特に冬場は山頂から、富士山はもちろんのこと、双眼鏡があれば南アルプスの農鳥岳と塩見岳の白い山巒がきれいに見えます。

**高橋 正身**(理73) 丹沢のふもとに住んでいますので、大山を眺めながらの散策を楽しんでいます。

**松浦 壽彦**(工75) 登山は2時間が限度で、最近ほとんどご無沙汰しています。健康寿命を少しでも長く、月2回のゴルフと週2回(目

標)の筋トレにジム通いをやっています。毎日の満員電車が少し苦痛に。腰痛に悩まされています。酒はめっきり弱くなりました。

**上松 一雄**(工75) 相変わらず姫路に住み、仕事は高砂と品川を行ったり来たりです。年末に娘に女の子が生まれ、10月末から1月末まで我が家において、にぎやかな年末年始でした。

**木嶋 良雄**(工79) 最近音楽にはまっています。先日三沢市文化協会40周年記念式典で演奏しました。フルートアンサンブルの伴奏で、男女混声合唱団が合唱。私はフルートを吹きました。

**村田 正弘**(工81) 昨年は蝶ヶ岳、霞沢岳と、穂高の絶景を期待して登りましたが、結果は雲に隠れて穂高の雄姿を見ることが出来ませんでした。

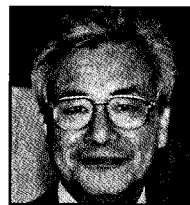
**畑 秀信**(人84) 昨年GWにニューヨークのクック山に行きましたが、あっけなく敗退しました。

**光永 正樹**(理95) 単身赴任中で山には行っていません。年1、2回ぐらいの頻度で続けられればよいかなと思っています。

**河野 美樹**(医05) 山登りはしていませんが、相変わらずパラグライダーで空を飛んでいます。空から眺める山々もまた素敵です。

## 追悼

**堺谷 弘氏** 昨年12月11日、誤えん性肺炎のため死去、88歳。1953年理学部卒。山岳部時代の活動は不明だが、晩年は山岳会の会合にしばしば出席。軽妙な語り口で知られた。自宅は大阪市西成区。



**村井 忠雄氏** 1月9日、胃がんのため死去、80歳。1961年工学部電気科卒。現役時代は59年春の黒部川上廊下積雪期初横断山行などに参加した。自宅は東京都国立市。

## 編集後記

今号の報告は、80歳を超えられた兼清さんを筆頭に、70歳代の山田副会長ら年配の会員のみなさんの元気が目立つものでした。慎重な登り方と併せて、よく似た年齢格好の小生には頭が下がる思いです。巻頭の白馬集会には、私も欠かさず参加していますが、このままでは先細りです。同期会などによる参加も計画していただけないでしょうか。

(会報担当・高田邦雄)